

4章

【問題】(演習)

出典：『今鏡』巻六「ふぢなみの下ゑあはせのうた」の一節 / 東京大学 文科系 前期 91年

現代語訳

宗俊の大納言は、その御母上は宇治大納言隆国の娘である。(この宗俊大納言は)管弦の道に秀でていらつしやつた。時光という笙の奏者に(笙を)お習いになった時に、大食調の入調(という秘曲)を、(時光は)「もうすぐ(教えて上げましょう)」もうすぐ(教えて上げましょう)」と言つて、何年たつてもお教え申し上げないでいたところ、(或る)雨がひどく降り(続い)て、真つ暗な闇夜だった晩に(時光が)現れ来て、「今宵例のものをお教え申し上げましょう」と申し上げたので、(宗俊大納言は)喜んで、「早く(教えて下さい)」とおつしやつたのを、(時光は)「あなた様の)御殿の中では、ひよつとすると耳にする人もございましょう。(あまり人の来ない)大極殿へお出まし下さい」と言つたので、(宗俊大納言は)新たに牛(車)などをお呼びつけになつていらつしやつたところ、「御供は、(誰も)お付きしないのがよいでしょう。時光がひとり(お供します)」と言つて、蓑笠を着て(随行して)いた。(宗俊大納言が)大極殿にいらつしやつたところ、(時光は)「やはり(それでもまだ、人がいないか)気がかりでございます」と言つて、続松を取つて、改めて火をともしして(あちこち調べて)見たところ、柱に、蓑を着て寄りそつて立っている者がいた。「そこにいるのは何者だ」と尋ねたところ、「武能」と名のつたので、(時光は)「やはり思った通りだ」と言つて、その夜はお教え申し上げずに帰つてしまつたと申す人もいた。また、「(武能にも)それほどに(秘曲を学びたいという強い)意志があることだ」と言つて、(宗俊大納言と一緒に武能にも秘曲を)教えた(というように)も耳にしました。それは間違ひであつたのでしょうか。

問1 お供には(きつと)誰もいなくてよいでしょう。

問2 それでもやはり誰か秘曲を聞こうとしている人がいないかどうか気がかりでございます。

問3 武能の、雨が激しく降る闇夜にもかかわらず、大極殿までついて来た行動が、真剣に秘曲を学ぼうとする強い意志を持っていると判断される。(64字)

出典：『今鏡』〈昔語第九〉「村上帝と延光の事」の全文 / 立教大学 経済学部 85年

現代語訳

村上天皇が、延光大納言に、「私が（この世から）いなくなったらその時に（＝私の死後に）、（私のことを）忘れずに思い出してくれるだろうか」などとおっしゃったので、（延光大納言は）「どうしてほんの少しでも忘れ申し上げることがありませんか、いやそんなことはありません」と答え申し上げなされたところ、（村上天皇は）「時々は思い出すとしても、どうしても忘れなことがあろうか、いやそれはないだろう」とおっしゃったので、（延光大納言は）「御喪服を脱がずに、一生を送ろうと思えますので、（自分の着ているものがいつも）変わらない（鈍色の）袂の色でありますならば、（天皇を）忘れ申し上げることのできない端緒であるに違いありません」と奏上しなされて、ほんとうにその約束にそむかずに（喪服のまま）いらっしやったので、次の（冷泉）天皇の御代も、（延光大納言が）喪服のまま仕事なされたいらっしやるのを（冷泉天皇が）ご覧になって、御涙も押さえきれず悲しみなされたということだ。

その（延光）大納言が、夢で先帝（＝村上天皇）を見申し上げて、作りなされた漢詩を耳にしました。

夢ノ中ニ……（先帝にお会いした）夢の中で、もし（これが）夢の中の出来事だということを知っていたならば、たとえ（夢の中で）この一生を送るとしても、（あんなに）早くは目を覚まさないであらうに。（実際は、夢だとわからずに目を覚ましてしまったが、もっと長く夢の中で先帝のお姿を見続けていたかったなあ）

と（いう漢詩であったと）思われます。「夢と知りせばさめざらましを（＝もし夢だと知っていたならば、目覚めなかつたらうになあ）」という（小野小町の）歌と同じ心（を詠んだもの）であるに違いない。

問 1 (1) どうしてほんの少しでも忘れ申し上げることがありましようか。〔二十九字・解答例〕

(2) 反語

問 2 夢と知っていたら、覚めなかつただろうに。〔二十字・解答例〕

問 3 6

問 4 5

問 5 動詞・未然形 助動詞・未然形 助動詞・連体形

忘れ 一 ざら 一 む

未然形 未然形 連体形

問 6 (a) 〓も (b) 〓たと

問 7 4

問 8 1

問1 (1) 現代語訳の問題。品詞分解をしながら、単語の意味を正確に訳出する。

「いかでか」は副詞「いかで」に係助詞「か」が付いたもので、「どうして……か」という疑問、「どうして……か、いやそんなことはない」という反語、「どうにかして」という願望の三つの意味を表す。「つゆ」は副詞で、「少しも（……ない）、全然（……ない）」という意味。「参らせ」は、サ行下二段活用動詞「参らす」の連用形だが、ここではラ行下二段活用動詞「忘る」の連用形「忘れ」に接続している補助動詞で、「……し申し上げる」という謙讓の意を添える。「侍ら」はラ行変格活用動詞「侍り」の未然形で、やはりここでは補助動詞であり、「……です、……ます」という丁寧の意を添える。「む」は推量の助動詞「む」の連体形で、係助詞「か」の結びとなっている。傍線部は延光大納言の言葉で、自分が死んでも忘れずに思い出してくれるかという帝の質問に対する答えである。そこで、「いかでか」を疑問や願望の意でとるのは不適切。ここでは反語の意味を表していると考えられる。

そこで、傍線部を直訳すると、「どうしてほんの少しでも忘れ申し上げることがありましようか、いやそんなことはありません」となる。

ただし、設問には「句読点とも三十字以内」と指定があるので、「いや」以下の箇所を省く。明確に表現しなくても反語のニュアンスは表れている。したがって正解は「どうしてほんの少しでも忘れ申し上げることがありましようか」となる。

- (2) 先に見たとおり、「いかでか」には「詠嘆」の意味はない。そこで、「疑問」か「反語」のいずれかであるが、この二つはそれぞれ口語訳を試みて意味内容の上から判断する。ここでは、(1)で現代語訳をしたように、反語の意味が最適。したがって正解は「反語」である。

問2 現代語訳の問題。品詞分解をしながら文脈に合う単語の意味を判断していくことに変わりはないが、ここでは特に助動詞の意味に注意する。

「せば」は過去の助動詞「き」の未然形に接続助詞「ば」が付いたもので、反実仮想の助動詞「まし」を伴って、「せば……まし」の形で反実仮想を表す構文となる。反実仮想とは、事実と反したことを仮に想像することであり、「もし……だったならば、……だったであろうに」と口語訳する。「さめ」は上に「夢」とあるところから、「目を覚ます」という意味のマ行下二段活用動詞「さむ

〔覚む〕の未然形。〔ざら〕は打消の助動詞「ず」の未然形。〔を〕は「……よ、……なあ」という感動・詠嘆を表す間投助詞である。

そこで、傍線部を直訳すると、「もし夢だと知っていたならば、目覚めなかったらうになあ」となる。ただし、設問には「句読点とも二十字以内」という指定があるので、意味内容が変わらない程度に語句を削り、字数内に収める。したがって正解は「夢と知っていたら、覚めなかったらうに。」などとなる。

問3 古語の意味の問題。多義語の場合は、丁寧に文脈をたどりながら、その場に最適な意味を考える。

ここは、延光大納言の村上天皇に向けた会話文である。まず、「御服をぬぎ侍らで、この世を送り侍らむずれば」の内容を考えてみる。

「服」とは「喪服」を意味し、村上天皇の死後も喪服を脱ぐことなく、喪に服し続けて一生を送るつもりだと述べている。その上で、「変はらぬ袂の色に侍らば、忘れ参らすまじきつまには侍るべき」の内容を読み取っていく。「変はらぬ袂の色」とは、喪服の鈍色（濃いネズミ色）を表し、「忘れ参らす」とは亡くなった村上天皇を忘れ申し上げることである。そこでこの箇所は、「鈍色を身につけていますならば、天皇を忘れることのできない「つま」でありましょう」と口語訳できる。この口語訳した文中の「つま」の意味を考えると、選択肢6の「端緒、きっかけ」が最適であり、選択肢1～5は意味が通じないため、すべて不適切であると言える。つまり、喪服を着続けていることが天皇を忘れない手がかり、証拠となると言っているのである。したがって正解は6。

問4 古語の意味の問題。傍線部に用いられている単語の意味を正確に理解する。多義語の場合は、場面や状況を考慮して最適な意味

を考える。「色」にはさまざまな意味があり、「喪服の色、転じて喪服」という意味を表すこともある。ここでは、村上天皇の死後のことが話題となり、「御服」「変はらぬ袂の色」といった言葉も用いられているので、「喪服」という意味が最適。また、「ながら」は接続助詞で、ここでは体言「色」に接続して、「……のまままで」という意味を表す。そこで傍線部を口語訳すると「喪服のまままで」となる。したがって正解は5。

傍線部の前に、「まことにその契りにたがはずおはしければ」と記されていることもヒントになる。「その契り」とは喪服を脱が

ずに一生を送る、つまり村上天皇のことは決して忘れないという延光大納言の約束である。延光大納言は約束にそむかなかったのだから、選択肢1〜3の喪服と明らかに異なる装いは不適切である。

問5 品詞分解の問題。語と語の接続に注意しながら、単語を区切る。

「忘れ」はラ行下二段活用の動詞「忘る」が活用したもので、下に助動詞「ず」があるので接続から未然形。「さら」は打消の助動詞「ず」が活用したもので、ザリ活用の未然形。「む」は推量の助動詞「む」で、係助詞「か」の結びであるので、係り結びの法則から活用形は連体形である。

問6 漢字の読みの問題。知識問題であるが、送り仮名に留意して、訓読みを問われていることに気をつける。

(a) 「如シ」は「ごと（し）」とも読むが、助動詞「ごとし」は連体形や体言、格助詞「の」「が」に接続する。ここでは直前にあるのが格助詞「に」なので、助動詞として読むのは接続から不適切。下に、助動詞「まし」の未然形「ましか」に接続助詞「ば」が付いた「マシカバ」という仮定条件があるところから、仮定を表す副詞として「も（し）」と読む。

(b) 「縦じ」は「たと（ひ）」と読む副詞で、ここでは下に接続助詞「トモ」があるので、逆接の仮定条件を表し、「仮に……しても」という意味になる。

問7 読解問題。主題を問われている場合は、本文全体をよく読み、登場人物相互の関係や心情に注意して、作者が描きたかったものを探る。本文の内容をたどってみると、最初に「自分の死後、自分のことを思い出してくれるだろうか」という、村上天皇の質問がある。延光大納言は、決して忘れることはないと答えるが、天皇は常に忘れずにいることは無理だろうと言う。それに対して大納言は、喪服を脱がずに一生を送りましょうと言い、その約束どおり、次の冷泉天皇が帝位に就いても喪服を身につけ、村上天皇を偲んでいたのだった。また、大納言は夢の中で村上天皇の姿を見て、もし夢であると知っていたならば、目を覚まさずに夢を見続けていたかったという漢詩を作った。

どちらの話も、延光大納言の、主君である村上天皇に対する情愛の深さを描いたものである。したがって正解は4。選択肢にある「情宜」とは「人情の義理、交遊の情愛」のことである。なお、選択肢1は本文の前半、5は本文の後半の内容しかとらえてい

ないため不適切。2は「後の帝」である冷泉天皇が主体となっているが、ここでは、村上天皇と延光大納言の関係を重視すべきである。また、3の「臣下」は延光大納言を指すと考えられるが、「臣下の」とあるならばともかく、「臣下への」というのでは内容に合わず、やはり不適切。

問8 文学史の問題。有名な作品については、作者や成立時代とともに文学ジャンルもしっかり頭に入れておくこと。

『今鏡』は平安時代に成立した歴史物語。選択肢1の『栄花物語』も同じく平安時代に成立した歴史物語。したがって正解は1。
なお、2『宇津保物語』は作り物語、3『宇治拾遺物語』は説話、4『伊勢物語』は歌物語、5『平家物語』は軍記物語である。

出典：応劭『風俗通義』／ 東京大学 前期日程 02年

書き下し文

応劭 汲の令たり。夏至の日を以て主簿杜宣を見、酒を賜ふ。時に北壁の上に赤弩を懸ぐる有り、盃中に照り、其の形蛇のごとし。宣畏れて之を惡む。然れども敢へて飲まずんばあらず。其の日便ち胸腹の痛切なるを得て、飲食を妨損し、大いに以て羸露す。攻治すること万端なるも、癒ゆることを為さず。後、榭事に因りて過りて宣の家に至り、窺ひ視て、其の変故を問ふに、云ふ、「此の蛇を畏る。蛇腹中に入れり」と。榭事に還り、思惟すること良久しくして、顧みて弩を懸ぐるを見るに、「必ず是れなり」と。則ち鈴下をして、徐に輦を扶ぎ宣を載せしめ、故処に於て酒を設くれば、盃中に故より復た蛇有り。因りて宣に謂ふ、「此れ壁上の弩影なるのみ、他怪有るに非ず」と。宣の意遂に解け、甚だ夷釋し、是れ由り瘳え平らぐ。

現代語訳

応劭は汲県の長官である。夏至の日に(部下の)主簿杜宣を引見し、酒をお振舞いになった。その時(部屋の)北側の壁の上に赤い大弓が懸かっていることがあり(「懸かっている」、(杜宣の)盃中(の酒)に映って、その(盃中に映った大弓の)形は蛇のようだった。杜宣は(その蛇を)忌み、それ(その酒)を飲むのを嫌に思った。しかし(上司の長官の振舞酒である以上)飲まないわけにはいかなかった。その日(杜宣は)そのまま胸と腹の激しい痛みを覚え、(その痛みが)飲食を妨げ(食欲が)減退し、ひどく衰弱した。(症状を)癒そうとすることは、さまざまに手を尽くしたが(「症状を癒そうとしてさまざまに手を尽くしたが」、癒すことができない。後に、応劭が事のついでに(杜宣の家のあたりを)通り、杜宣の家を訪れて(家の様子を)窺い見て(異変に気づき)、その異変を問うた(「どうしたのかを聞いた」)。(杜宣が答えて)言う(のは)、(「この(「先日閣下から戴いた酒に入っていた)蛇を恐れ

ております。(その) 蛇が(私の) 腹の中に入っているのです」(と)。応槌は役所に帰り、(杜宣の言ったことについて色々) 考えることしばらく、(ふと) 振り返って(壁に) 大弓が懸けてあるのを見ると「(杜宣が蛇云々と言っているのは) きっとこれに違いない」(と思つた)。なので護衛兵に命じてゆっくりと輿を担がせ(それに) 杜宣を載せさせて、(夏至の日の位置と同じ) もとの場所で「夏至の日と同じ位置に杜宣を座らせて」酒を用意すると、盃の中に以前(「夏至の日」と同様に再び蛇がいた。そこで(応槌が) 杜宣に言う(のは)、「これは壁の上に懸かった大弓の姿(が映っているの)であるだけだ、何かの怪異が起こっているわけではない」(と)。杜宣の(腹中に入ったと思ひこんでいた蛇に対する) 恐怖心は遂に解消し、(杜宣は) 非常に喜んで、この時を境に(症状は) 平癒した。

解答

問1 (ア) 杜宣は盃の中の蛇を恐れ、飲むのを嫌に思った。しかし思い切つて飲まないわけにはいかなかった。

(イ) 県の長官であり上司である応槌の振舞酒だったから。

問2 杜宣は盃の中に潜んでいた蛇を飲んでしまったと思ひこみ、恐怖心かられたから。

問3 杜宣が言う盃の中にいた蛇とは、きつと壁に掛かった大弓が映つたものに違いないということ。

問4 応槌に事実を指摘されて、蛇を飲んだというのが自分の思ひこみであったと理解したから。

書き下し文

管仲くわんちゆう曰いはく、吾われ始はじめ困くるしむ時とき嘗かつて鮑叔ほうしゆくと賈こす。財利ざいりを分わかつに、多おほく自みづから与あたふ。鮑叔我われを以もつて貪どんと為なさず。我ひんの貧ひんなるを知しればなり。吾嘗わがて鮑叔の為ために事ことを謀はかりて更さらに窮困きゆうこんす。鮑叔我われを以もつて愚ぐと為なさず。時に利りと不利ふりと有あるを知しればなり。吾嘗わがて三みたび仕つかへ三たび君きみに逐おはる。鮑叔我われを以もつて不肖ふせうと為なさず。我わがの時に遭あはざるを知しればなり。吾嘗わがて三みたび戦たたかひ三みたび走に走にぐ。鮑叔我われを以もつて怯けふと為なさず。我わがに老母らうぼ有あるを知しればなり。公子糾こうしきゆう敗ふれ、召忽せうこつ之これに死しし、吾幽囚いゆうしゆうせられて辱はづかしめを受うく。鮑叔我われを以もつて無恥むちと為なさず。我わがの小節せうせつに羞はぢずして功名こうめいの天下てんかに頭あはれざることを恥はづかしむるを知しればなり。我わがを生うむ者は父母ふぼ、我わがを知る者は鮑子ほうしなりと。

現代語訳

管仲が言った。「私が若い頃(貧しくて)苦しんでいた時、かつて鮑叔とともに商売をした。(その)利益を分配するときに、(私は利益の)多くを自分に与えた(＝私の取り分を多くした)。(しかし)鮑叔は私を貪欲とは思わなかった。(彼は)私が貧乏な状態であることを知っていたからである。私はかつて鮑叔のためにあることを計画し、更に困窮してしまったことがあった。(しかし)鮑叔は私を愚か者とは思わなかった。(彼は)時によって運不運があるということを知っているからである。私はかつて三度(主君に)仕え、三度とも主君から追い払われた。(しかし)鮑叔は私を不來な者とは思わなかった。(彼は)私が時の流れに合わない(＝その時の状況が私にとって不運である)だけであると知っていたからである。私はかつて三度戦つて三度とも(そこから)逃げ出した。(しかし)鮑叔は私を臆病者とは思わなかった。私には(私だけを頼りにしている)老いた母がいることを(彼は)知っていたからである。(私の仕えていた)公子糾が(戦いに)敗れ、(糾の臣下の)召忽がそれによって死に、私も牢に囚われて辱しめを受けた。(しかし)鮑叔は私を(主君に殉じない)恥知らずとは思わなかった。(彼は)私が些末な節義に恥じず、(大義のための)手柄と名譽が天下に顕れないうこと(＝大義に殉じて手柄をあげ、名譽を手にすることができないこと)を恥とすることを知っていたからである。私を生んでくれたのは父母であり、私を理解してくれる者は鮑叔である」と。

解答

問1 ア 貪欲 イ 羞恥 (いずれも解答例)

問2 多くを自分の取り分とした。(解答例)

問3 知時有利不利也 / 知時有利不利也 (別解)

問4 ③ みたびきみにおわる ④ われのとくにあわざるをすればなり

問5 管仲は些末な節義よりも大義に殉じて功名を立てることを重んじる男であると考えたから。(41字・解答例)

解説

個々の設問を考える前に、本文全体の構造を把握すること。最初「管仲曰、」とあるが、言うまでもなく直後「吾始」以下が会話文である。この会話文がどこまで続くかを見極めること。結論的に言えば本文の最後までが会話文。この本文全体がひとつの会話文であるということである。さらに、「吾始」から末尾の「鮑子也」までの間、「吾始 知我貧也 (本文1〜2行目)」「吾嘗 不利也 (本文2〜3行目)」「吾嘗 不遭時也 (本文3〜4行目)」「吾嘗 老母也 (本文4〜5行目)」「公子糾 天下也 (本文5〜6行目)」「それぞれ」の構造は、極めて酷似している。この5箇所は正確な意味での「対句」ではないが、「私は(かつて) AしてBとなった。鮑叔は私をCと思わなかった。Dを知っていたからだ」と、基本的な構造は共通である。本文を通読した段階で、以上のことをおさえたうえで、個々の設問を考えてゆく。

問1 ア 簡単な設問だが、念のため言っておけば、ここの「貪」は名詞として機能している。「以A為B (Aを以てBと為す) Aを

Bと思う・考える」の形の「B」の位置にあり、構文上「為」の補語である。「貪欲」「貪婪」などが答となる。

イ 「羞」を用いた、一般的な熟語を思いつけばこれも簡単な設問だが、この場合は文の構造もヒントとなる。設問部を含む一文「知我 天下也」は、「我不 天下」までが述語動詞「知」の目的語・補語として機能している節であり、「羞」はその節の中で「不」を伴っていることから(動詞として機能している。また、この節全体が「不羞 A恥B」の形になっていることから考える

と、「AをくしないでBを恥づ」と、「不羞」と「恥」が対応関係になることに気付くだろう。このように考えてゆけば、「羞恥」という熟語が出てくるはずだ。

問2

まず前後の文脈をおさえる。直前「(商売をして) 財利を分つに(利益を分けるときに)」で設問部分の「与」という述語動詞につながってくるのだから、何を「与」えるのかは明らか。「商売の利益」で、この「与」は「分配する」ぐらいの意味であることがわかる。したがって「多自与」の「多」も、利益の分配の多寡を言っていることとなる。あとは「自」をどのように考えるかで、これも直後の内容「鮑叔は私を貪欲とは思わなかった。私が貧しいのを知っていたからである」なので、「自与」は「貪欲」と思われかねない行為だということになる。当然「自分で(自分に)多く分配する」、つまり「自分の取り分を多くする」ということである。

問3

まず、この解説の冒頭に触れたように、設問部分は「知我貧也(2行目)」、「知我不遭時也(4行目)」、「知我有老母也(4〜5行目)」、「知我く天下也(5〜6行目)」と対応する部分である。この点から設問部分「知時有利不利也」の基本構造は「知(述語動詞)―「時有利不利(補語)―「也」と判断できる。あとは「有利不利」の部分をどのように考えるのだが、二つの考え方があり、この場合どちらでもよい。

その一は、「有利」と「不利」をそれぞれ「知」の並列された目的語・補語の類ととらえる見方で、全体として「AとBとを知らる」の形になる。その場合、「有利」は「利有る(補語なので連体形)」と「不利」のほうは注意。「利ならざる」とでは「有利」と対応しないので、こういう時は「利あらざるとを」と、ラ変動詞「あり」を補って訓読するのが普通。

その二は、「利」と「不利」とを「有」の並列された目的語とする考え方で、この部分を「利と不利と有るを(利・不利有るを)」と訓読することとなる。

いずれの場合も、「時有利不利」が全体として名詞句になることに注意。

問4

③ 述語動詞が「逐」で、その後の「君」が補語であることに注意。置き字「於(・于・乎)」が用いられている場合、続く名詞(句)が補語であるという知識は構文把握の基本。したがって「逐於君」を「君を逐ふ」とは訓読できない。当然「見」も動詞

では意味が通じない——うるさいことを言うようだが、「見」を動詞と考えると、返り点から「逐於君」が「見」の目的語・補語で、「見」という動作の対象が「逐於君」となるが、「君」が「逐」の補語である以上、意味が通じなくなる——ということになる。動詞でないとする、「見」は、動詞「逐」から返って読む点から助動詞・否定詞の類と考えられ、「見」の用法から受身の助動詞として機能していると判断する。以上の点から「見逐於君」は、「君に逐はる」と訓読することになる。あとはその前にある「三」だが、「見逐」という述語句の前に位置すること、設問部の直前に「三たび」——「仕へ（述語動詞）」と同様の構文がある点から、「三たび」と読むことがわかる。

④ 解説冒頭に触れた、本文全体の構造から考えてゆけば簡単な問題。すでに問3の解説でも言ったように、設問部分と対応する「知我貧也（2行目）」、「知時有利不利也（3行目）」、「知我有老母也（4～5行目）」、「知我々天下也（5～6行目）」の部分を参考にすればよい。一つだけ注意すべきポイントを挙げておけば、「不遭時」はもちろん「時に遭はず」だが、この部分全体が述語動詞「知」の目的語・補語の類であるということ。「ず」を連体形「ざる」と活用させ、格助詞「を」を用いて「知」につなげる。

問5

これも文全体の構造から考えれば、答の材料となる場所は明らか。解説冒頭で触れたように、「私は（かつて）AしてBとなった。鮑叔は私をCと思わなかった。Dを知っていたからだ」が繰り返される構造なので、設問部分のある箇所「Dを知っていたからだ」にあたる部分が鮑叔の判断の理由ということになる。その部分「知我々天下也」は、問1イでも解説したように、「Aを恥じずBを恥じる」ことを「知っていたから」という内容で、Aにあたる「小節」、Bにあたる「功名不顯于天下」の内容が問題となる。設問部分「鮑叔不以我為無恥（鮑叔は私を恥知らずと思わなかった＝鮑叔はわたしをCと思わなかった）」を含むブロック「公子糾」以下は、「私の主君公子糾が敗れ、（私と同じ臣下の）召忽はそのために死に、私は牢に捕らえられて屈辱を受けた」で、「鮑叔不以我為無恥」に続く。とすると、「召忽死之」に対して、「私」の「牢に捕らえられて屈辱を受けた」という状態は「無恥（恥知らず）」と誇られかねない状態だったことになる。つまり主君に殉じて死んだ召忽に対して、そうせずに捕らえられて辱めを受けた「私」という構図になる。鮑叔がそういう「私（＝管仲）」を恥知らずと思わなかった理由が、「小節を恥と思わず」を恥と思う男だと知っていたから」ということなので、ここで言う「小節」の「節」は「主君に対する忠節・節義」などという意味と考えられる。それを「小」というわけだから、「小節に羞じず」は「些末な節義に殉じないことを恥と思わず」ぐらいの意味

である。これがわかれば、「恥功名不顯于天下」の直訳「手柄と名誉が天下に顯れないことを恥と思う」が「些末な節義ではなく）大きな節義に殉じないことを恥と思う」という内容であると判断できよう。以上をまとめれば答が出る。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--